

氏名 近藤みゆき

本論文は、古代後期（平安遷都から十一世紀半ばまで）の和歌文学について、歌人相互の関連と漢詩文からの影響を重視しつつ、その表現の特質を解明しようとするものである。まず序章において古代後期和歌史全体を展望し、その特色を指摘したのち、本論を四つの章から構成する。

第一章「河原院文化圏と初期定数歌人群」は、河原院を交流の場とした歌人たちの表現がどのようにして生成したかの解明を主眼とする。恵慶・曾禰好忠・源道済の漢詩文受容を具体的に分析する中から、各個の独自性や影響関係を明らかにし（第一節）、彼らの眺望の歌が中国・日本の漢詩文を背景にすることを多くの事例によって証明し（第二節）、また河原院が隠者文学の始発ともいえる交流の場となったことを指摘する（第三節）。第四節は、『古今和歌六帖』の特異語を私家集と比べつつ数量分析し、それらが曾禰好忠らに影響を与えたことを解明し、あわせてそこから同書の成立に関する新見をも提示する。

第二章「漢詩文の受容と和歌」は、一条朝前後の和歌の漢詩文受容の具体相を分析する。第一節はこの時期の白楽天受容を一覧整理した労作で、これを受けた第二節は源道済の漢詩文受容の方法を抽出し句題詠法と名付け、それを和泉式部などにも共通する方法だと見る。またその道済の参加した「寛弘五年或所屏風」の成立や、その和歌の漢詩からの影響を分析する（第三節）。第四節は一条朝期から院政期への漢詩文の叙景表現の変化を指摘し、それが源経信の和歌の変化にも対応しているとの創見を示す。第五節は和泉式部の漢詩文受容の初期環境としての河原院文化圏の重要性を指摘する。

第三章「転換期の女流歌人 相模を中心として」は、後朱雀後冷泉朝期を代表する歌人相模について、その伝記を細密に分析する中から、相模国からの帰国の年次や叔父為政との関わりなどを新たに解明し（第一節）、家集流布本『相模集』の物語的手法を析出し（第二節）、その詞書の文体を文学史的に定位する 手習の文体 なる視点を提示する（第三節）。いずれも緻密な実証に基づく成果で、従来の研究史を更新したものである。

第四章「歌ことば」に見る規範の形成と受容」は三節から成るが、いずれも、Nグラム集合分析と名付けられた著者の考案する歌ことばの統計分析法を駆使し、『古今集』の歌ことばに男女の性差が存在することを初めて明確に示したうえで、その文学史的意義を論じている。

本論文は、古代後期の和歌文学について、徹底して実証的な方法に基づき、個々の歌人の伝記・人物関係・表現方法について多くの具体的な新事実を明らかにする。のみならず、『古今集』という規範を乗り越え、和泉式部・相模などの作品に見られる優れた達成へとつながってゆく文学史的な必然性をも解明したものと評価することができる。

本論文は、題目に比して古今集時代の歌人への言及に物足りないものがあり、また第四章などに更なる方法的整備が求められるなどの難点もあるが、本審査委員会は上記のような研究史的意義を認め、本論文が博士（文学）に十分値するとの結論に至った。